

●自閉症の児童・生徒を主な対象にて編制した学級の経緯

知的障害教育の特色として、生活の文脈の中で学ぶスタイルが主流であった。しかし、自閉症の子供には、教えるべき内容を整理して焦点化して教えることが必要である。集団の授業の中での個別の配慮だけでは適切な指導ができないことがみられた。また、自閉症の児童生徒の障害特性を配慮した指導方法や環境調整も必要である。このような指導が必要な児童生徒への教育課程の設定が必要だという考えのもと、自閉症学級が設置された。

●自閉症の教育課程の特色

・環境整備と構造化

実態に応じて聴覚刺激に敏感な児童生徒にはイヤーマフをしたり、視覚刺激には遮光眼鏡を用意する、姿勢保持に必要な椅子等を準備するなどの配慮を行う。また、コミュニケーションの状態に応じた代替手段等を準備することを必須にした。

活動ごとに場所を区切ったり、集中しやすく衝立などを活用するなどの構造化を図り、活動への見通しや学習に向かいやすい環境設定を行う。

・視覚的な情報提示

見通しをもつことや指示理解を言語だけでは難しい障害特性である。スケジュールや手順やルールなどを絵カードや文字にして提示することで、理解しやすくなり、自主的に動ける場面が増える。

・ルーチンを大切に学習

自閉症の児童生徒は手続き的記憶が得意である。日によって活動内容が変わるのではなく、同じ手続きで活動が繰り返されるような学習内容を設定する。繰り返し取り組むことで、見通しがもちやすくなり、混乱なく学習に取り組めるようになる。

・障害による困難さを改善・克服するための学習の設定(社会性の学習)

自閉症の児童生徒は対人関係、コミュニケーションの困難、こだわりや想像力の障害が障害特性として挙げられる。実態に応じた対人関係の基礎を築く取り組みや、コミュニケーションの手段の確立、ソーシャルスキルの獲得を目指す学習に取り組む。学習の方法としては、手続き記憶やマニュアル等に沿った行動など得意なことを活かして取り組んでいる。

●自閉症への対応後の変化

・自閉症の児童生徒への配慮は、知的障害の児童生徒にも有効である。特に、学習を支える学びの部分である環境調整や視覚的な情報提示は、知的障害の児童生徒にも必要であると校内でも共通理解し、学校全体で取り組むようになった。

・教室環境が学校全体で整い、児童生徒へのアプローチの方向性が一定になった。無駄な教師の言葉かけや手をかけることが減り、児童生徒が自主的に動くようになってきた。コミュニケーションの代替手段を教室以外でも使用し、コミュニケーションの場が広がり、自ら表出する児童生徒が増えてきた。